

## 漂流記『うばらがはな』翻刻と解題（8）

崎村弘文

【欧文表記】 Hirofumi Sakimura A Document of Drifting, Ubaragahana: Text and Bibliographical

Notes (8)

【要旨】 文政十三年正月二十日、南京船永泰に乗った八丈の漂流民・船頭儀兵衛らはついに長崎にたどり着いた。僚船源発は先着いていたが同乗の水主助次郎は船中で病没していた。残った十二名は、幕府役人の手を経て帰島を許され、九月八日八丈に帰着し人々と悦びを分かち合った。

### （〈支那日記〉 つづき）

○卅日空／晴風なぎて海面いと平らかなり船やるへきやうなくして沖合に／ゆられたり昨日夕迄ハチーナの高山かすかに見えしがけふハ山も又／船の通ふをも見る事なし同しやうに出し三艘の船二ツは遠所に」（136オ）ゆれ今一ツハ見えす○十二月朔日空晴風なぎて昨日のごとくゆれ／居たり船は丑を向て居る○二日空晴西風強く吹て中なる柱にのミ／帆上げて走る此日ハ餘の船一ツも見えず丑寅さして昼夜走る○三日空晴風昨日より強し丑寅に船走る巳の刻より風増て波高く／船おし上げおし下しゆるる夜に入て猶一かさ風烈し夜半斗にか、し／けん面楫の方へ傾ければ帆を下さんとすれど風烈しく帆をひしと吹つけ／ければ帆綱を引けども

下らす其間に弥傾き山べり船の事／ほとく／水に／ひたり今やかへらんとす人々大に騒き走り廻り働く船頭は船玉支那人ハ／案に天妃氏の女宋ノ太祖建隆元年三月廿三日生る太祖ノ雍熙四年二十八歳にて天妃といふ／ハ閩の林水に落て死す宣和以来威靈甚多し元ノ世祖封て天妃と号す今祠福建興化府の湄洲ノ前に立て九拝して安穩をいのりけり兎角して帆を引おろし」（136ウ）たれどもその帆をた、みたる高サハうづ高ければ是に風さえ船ハ直りも／やらずか、る時に面楫の方に積たるアンペラの行李箱物などを夥敷／はね捨猶大水桶を六ツ迄籜ケカを切て水を泄らしければ船少し直り／ける猶荷をはね捨て後やうく／船正しうなりたりそこら水ほどばしマ／りぬれて船底ハ水多く湛えぬ人々色を直してヨカく命アロなど日本ノ詞にて申あへり此後ハから柱なれど風烈しければ針を正して楫を定めて船はしり行く只今の有さま誠に危く今にもくつかへりぬべかりしを／不思議マにしマのぎおほせぬ

是そさきの夜の夢に合ふなれとて心の中に／神仏を小やミなくた  
(ママ)  
 ヅへいのり念じけりさて程もあらて夜も明たり○／四月空晴風昨  
 日に同じ船ハ子丑へひらき走る是ハ風烈うして東南へ(137オ)  
 おちやすきがためなり夜に入りて風少し和らきたり○五日空晴西  
 風／昨日より吹弱りたれどされども猶強し中の柱に帆八分もたせ  
 はしる日／くれに子の方に当りてはるかに山見ゆるこれはミシマ  
肥前五島の沖にメシマ／たかへたる  
といふありそれを覚え  
 入て風大に和きたり○六日／空晴西風烈しからす三ツの柱に帆を  
 まく昨日はるかに見えしミシマの傍／を朝の間に走り過る島三ツ  
 あり一ツハ遠くはなれ二ツハ一處に並らべり／いづれも小島なり  
按に此ミシマと云は薩戸の内宇治島草かき島絵島をさして／許へだつ遠くはなれたるハ草垣  
 云なるべし二ツ並らぶといふは宇治嶋絵島にて其間二十丁／島とて宇治島より十八里沖ニ  
 あり宇治草垣共に／山あり絵島ハ平島なりいづれも  
左衛門といふ漁人毎年八十八夜後此島  
 二三里廻りの小島にて人家なし加世田より長左衛門  
へ漁人数百人渡し／漁○をなす晩秋皆  
 悉返り去て冬ハ  
 爰を去り過キ行に昼頃／子の方に山見ゆ日くれには高  
 山数多見ゆる是ハサツマなりと船中大に悦び(137ウ) あへり○  
 七日空晴薩摩の山／近くなる儘にみれば大山いくつもかさなり  
 ／奥深く見ゆ昼後にかの山下へ船いたりければ向より小舟五艘こ  
 き来り唐船／より綱をつけて港の内に引き入れこゝに船を留め碇  
 二ツ左右ニ入るに又／此所より大碇武ツのせ来り唐船の左右に入  
 れそが綱を唐船へ打入るにチーナ／の水主共船につなぎ置く彼小  
 舟も傍につなぎ居る様にて時々ハ唐船／の中へも入り来れり爰は  
 薩戸加世田の内片浦といふ所なりとそ○八日／空晴巳の刻頃小舟  
 一艘こぎ来り薩戸の役人とおほしきが六人唐船へ／上りチーナ人  
 に向ひ何やらんしバし物語あり此人々ハ唐音にて對談し／くわし  
 く分りたるさまなり其後我等に御尋有之よりて始より漂流／の本  
 末を申ければ永く／外国に有て嘸難儀なるべし所用あらバへだて

(138オ) なく申せかし調へ得させんと懇に仰ける偕此人々ハ小舟  
 に乗りにて／帰られしに又しバしありて小舟をこぎ来り足輕体の人  
 三人町人体の者三人／唐船に入る此町人とおほしきハ長崎迄の道  
 サきにて船に留り足輕体の／人ハチーナ人二人をつれ小舟にのり  
 て帰りたりこは人質を取かはしたるに／こそあれ彼道サきの人々  
 とさま／物語し久々にて日本のはなし聞き／早故郷に帰りし心  
 地しけり○九日空晴爰より南の方を小浦濱と／いひ北を片濱とい  
 ふよし國の守のおハします鹿兒島となんいふは爰より／東に当り  
 廿四五里あなたにありまた長崎ハ北に当りて七十里餘海を／へだ  
 てたりなと道サキ人物語なり此片浦は打見る所漁獵のミの地と／  
 おぼえて百性とミゆる家はなし又大船もなく小舟のミなりき○十  
 日(138ウ) 空くもる昼後小舟二艘こぎよする役人大勢唐船に上  
 りさきに来りし／人種々と對話あり今日初て来し役人ハさきの人  
 々よりハ上ハ役とおほえ／て刀脇差衣服迄もよく見えたり此人々  
 ハ程なく帰られぬ○十一日雨ふる○十三日小雨ふる○十四日空  
 くもる○十五日空晴西風烈し港内浪高し夜ハ／風止む○十六日空  
 くもる又西風吹く○十七日小雨ふり西風吹く○十八日／雨ふり西  
 風少し立午の刻過に子持筋引たる帆かけし船一艘港口より／入来  
 り唐船より二町斗傍にかけたり道サキ人に尋ねしに長崎より来る  
 警固船とぞ云なる是を見て浦の方より小舟五艘に役人多くのりて  
 かの／長崎舟によせ彼方よりも役人二人小舟にのりて唐船に來り  
 船頭其外人々に／唐音にて對話し我／くの事もくわしう尋られ其  
 後酒肴を出して大に(139オ) もてなす申の下りに皆々帰り去ら  
 れき○十九日雨ふる○廿日空くもり／西風吹く○廿一日○廿二日  
 ○廿三日○廿四日○廿五日此らの日同じく空く／くもり西風吹て寒

し○廿六日空晴西風吹く○廿七日空晴南風／にかハリければ船を出さんとてその用意あり巳の下りに引船五十艘来り／一人の五、六人を揚此処の二ツの碇ハ余ノ船に綱を付て此港を引出すチーナ／人の碇を上るハ脚船を卸しそれに三四人乗て引き揚て一人綱を引てアイロと／いへば餘のものそれにつれてウンスといふアイロウンス／といふ聲音あやしき／ふしなして長崎船其外にハ此所より役人の乗たる船五艘皆同しく／おし出す我等こゝに来りてより廿日を経て船を出せしなり港の外にて／唐船帆を揚て沖合を走れははや引舟にハ及はず綱を解て引舟ハ地方(139ウ)にそひておし行く各聲を立てこき渡るさまゆゑしかりし日くれて風／和らき山かけに船をかくる○廿八日空晴夜明ければ風北にかはるされ／どもつよからねば五十艘の引舟を立て引き行くに大なる島ありこしき／島とそいふなる十三里なかれたりと聞き是を過て行けば又向ふに／大なる島あり是は天草といふ此島のこなたに船をとゞめぬ○廿九日空／晴北風なきたり引舟の力をたのミて天草を過てこき行にはるかに島かけ／見ゆる道さき人に尋るに肥前の五島となんいふやがて長崎ハかの東に／ありと申夕くれになりて北風強く吹おこり引舟もすゝミかたしといふチーナ／人さま／くに申せども力及ばす又こしき島をさして船を返しぬ○卅日／空晴北風弥ましに吹すさびてこしき島へと走りけれども是へも入兼(140オ)夜一夜はしる○明れは文政十三寅正月元日也空ハくまなく晴たれど／北風烈しくこの夜しもやう／くにして本の片浦にそ入りたるさきのごとく／此所の碇をそへ入て小舟共ハ浦輪に帰り去れり○二日空晴戌亥の風吹く辰の刻御役人五六人来りチーナ人何やらん申ければ立帰り昼過る／比薪魚野菜多く小舟につミ持来り唐船に

送りぬさて船の者とも／事なき日は酒のミ物くひする事いづれも同じわきてけふは正月二日／なれハにやさまく／其設けありけり凡水主共のごとき日々の飯にハ／四菜の添物して船頭より出すそれを足ると思ハぬにやおのれ／く肴を／調し肉を煮てくらふ我日本船などよりミれは其食もの、あかれる事／たとえん方なし又彼等すべて冷たる飯をくらはず飯くらふごとにもいつも(140ウ)新にかしきくらふ温なる飯も焦れぬればくらふ事なく焦れたると冷／飯になりしを共に俵の如きものに入れ溜て折／海に捨るなり興さめ／たるわざなり○三日空晴役人けふも来り船にて酒なんどすゝむ初め出られし役人道さき人に尋しに／鯨島仁藏と云御役人の由おのれに向ひ風あらくて又帰り来り／心うくぞあるらめさきにいふことく事足らハぬふしをばうらなくいへかしと／仰らるおのれ申ハチーナ人の萬づ心をそへて介錯せられぬれば申べき／ふしなし但しさきにも御心をそへられ今もまたしか仰ればそれをもかへ／さんはおそれありチーナを出し日よりハや二十七日になりたるに湯／あびる事のなきこそ心地あしけれハれ此レ斗ハ得させ給ふべうもやと申／ければやすき事なり後に迎ひの船おこすべければ打のりて参れとて(141オ)此人ハハ帰り玉ふかゝる処に万助留吉来りてさつまの御役人の何やうの事／たりともたらハぬふしあらバうらなく申せと一度ならず仰すれば我等七人／の者共へ人ごとに黄金五枚ゴウネイゴウチツ、借し給ふべうこひ給へこのよし我二人強くたのミ／申すといふこはあるまじき事也今我等をバ日本の御役人へ引渡しなけれバ／チーナ人の萬つ介錯せらるゝなり日々何の足らハぬふしやハある長崎へ／至りて後はる／陸路を旅する事あらバ其時こそ長崎にてともかうも斗／らふべし今こゝにていふべきにあらずといひければ

留吉座を立ながら／屎たれ船頭奴しや性根ハ粟粒ほどもあらず何をいふても糟ヌカに釘とやらん／なりとつぶやきつ、去りにき彼等が口さがなきは今に始ぬ事なり聞ては／あしかりければ耳をふたぎて過しぬしバしありて小舟一艘こぎ来り」(141ウ) 足輕と覚しが一人のりていふやう七人共に湯あびよこよとなりか、れは七人／共にそれのりて陸に上る海辺なる平屋作りの廣き家に案内す後に／聞はこ、の名主小右衛門てふもの、家とそ十疊敷斗の所に御役人六七人／あり其外下役村役と覚しき人々大勢ありし次の間八疊敷斗の一ト間に／参りける御役人の仰らるはけふは正月の三日なれば心斗祝ふべしとて／雑煮の餅を出され吸物酒さかな硯ぶたやうのもの遠くさく／出され心よく／飽まで給べけり扱其後湯に入りはておのれ又申はけふは三年目にて初て／日本の地へ上り其上くさく御祝給りまことに悦ひこれにますよしなし／しかハあれど今一ツねぎ申べき事こそあれ何れの御神にてもあれ此地に立せ／給ふ御神へ詣てバやと思ひぬ此事ゆるさせ玉へと申ければ何かくるしかる」(142オ) へきとて案内を出され半道ほど行て一ツの社あり此をふしをかみてぞ／帰りける又元のごとく小舟二のりて唐船へ上りけり今日詣てし神ハ何と申奉るにや餘の嬉しさにそを尋ねもらしつ○四日空晴西風吹○五日空／晴西風吹けれバ船出す事叶ハズ船中の人々日々酒のミおどりのしミ／日をおくる○六日空晴風なし昼前より南風吹く此風に船を出さんと／港内ひしめく申の前にやういと、のひさきのごとく五十艘の引舟にて／港の外へ引出しやがて帆を上てはしる餘の小舟もみな一やうに帆もた／せて暁迄走り行く○七日空晴暁より西風になりければこしき／島へ船かけんとすれど是へよせかね天草をさしてひらき帆に

して夜／と共に走る○八日空晴きのふの如く西風吹く午の刻斗に天草港の名をわすれ」(142ウ) たり／に船に入る長崎の舟片浦舟ともおつつがひ来るありまたはるかに／後る、もあり此湊に入れて纜を結ぶ片浦舟よりかしこの碇二ツを入れ／そへて唐船につなぎたり○九日空晴西風強かりければ船出さず／○十日空晴北風にかはる船の中心屈して覚えければかくと役人に／申バゆるされて陸に上りそこら逍遙グダリて見廻りはてには浴室に入て／船に戻る○十一日空晴風昨日にひとし○十二日空晴北風やハラきぬれば／引舟にておし渡らんとて片浦舟五十艘の上にこの地より六十艘の引舟／を出しやがて此所の道サキ人唐船に乗り加ハリ百十艘の引舟にて港を／引出す引舟ども聲を立ておし行く唐船の舳に両所の道サキ人采を採て／船子を下知すしかれども船の行事おそしやうく十四五里も来つらんと覚」(143オ) しき頃北風強く吹出しぬ引舟とも力を出し働けども向ふより吹来る／風にさえられて船行かず扱は元の天草に船かへすより外なしとはかりて／引舟をやめ船をおし直し帆一ツ巻上げむなしく本の港に帰り入る○十三日空くもる北風吹く夜に入て雨ふる○十四日昼より空晴て終日／北風吹く○十五日空晴北風吹くけふハ上元とやらん祝ふ日なるよし／魚を買ひ豚又は鶏鴨なんど殺し是らの物ハ所／に多く飼ひ船の底艀のおけるを出すさま／くに調して／未の初より酒くミかはすさま長崎の役人また此地の人も船にて渡り来て／いと賑しきさま也か、る所に若き女兒五六人小舟にておし来りアヂヤサン／くと／口々に呼ハリけれバチイナ人多勢駭オドロに立出て彼女子に向て何か申けるが／鉛オマリて作りたる戒指硝子の筭ゴロなどを取出し彼等へとらせけり其中」(143ウ) に眉目よき女子にハ多くとらせつれどさまでなきは一ツも得る事／なし見る中に彼女どし共あら

そひしてうバひあふチーナ人興あることに／して猶もとらせける  
 彼女ども多く得たれば船を帰しぬまた打寄て／酒くむに我等は肉  
 をくらハざれば鶏魚斗ぞ出されき皆々多ひ出て／小唄のごときも  
 のをうたひ月琴とかいふ物を弾き鳴らす立て舞も／ありおもしろ  
 く興ある事なり日くれになりて役人達ハ陸と船とに帰らる／此夜  
 も更たる迄かくてありしが其後ハそこ爰に多ひふしけれど船頭ハ  
 ／さすかに正しう見えて立廻り火をいませありきける○十六日  
 空晴／北風ふく○十七日空晴北風なごたりさきのごとく百十艘の  
 引舟をつな／き港を引き出す力を出し聲をかけ北に向ておし折ふ  
 し塩路よく日」(144才) 暮に肥前の内カバ島といふに船をかけた  
 り○十八日空晴風なごたり／朝此所を引舟にて出す薩天草引舟  
 左右にわかれきそひおす道サキ／人采をふりて是を励ましかけひ  
 きす支那人も舳に立出てオセやくと喚はり／或ハヒケく／なん  
 ど叫ぶ天草方に引たる綱や、もすればたるミ勝なるを／見て支那  
 人アマクサ、ラチヤアカンく／とつぶやきをりく／息を休めては  
 艚行／くぼとに終日かくしつ初夜の頃沖中に船をとむ○十九日  
 空晴きのふ／のことく引行く昼後になりて北風少し吹出たれどは  
 や長崎も近うなる／まゝに各いさミはげミて働く日くれ風なきて  
 便よし此曉近に長崎に／入れバヤとはやりけれどそれも叶ハずし  
 て夜明けたり○廿日雨少し／ふる巳の刻斗に長崎の港内に船をや  
 りて陸近う寄たり船の人々大に」(144ウ) 悦ひあへり中にもおの  
 れが心の中嬉しさ限りなし乍浦を出しハ十一月廿九日／にて日数  
 十四日経て十二月八日片浦に入りかしこに廿日船が、りし同廿八  
 日／長崎につきぬ乍浦を出し日より五十二日なり海路の里数凡三  
 百里あまり／と覚えし

唐山と長崎との間の海に溝といふ所ありしや尋けるに儀兵衛し  
 らずと／いふ鳥坂普陀の二島を尋ねしに鳥坂といふハしらす乍

浦の海口／三ツ斗りあり普陀落山といふむかし兩禪寺てふ寺あり觀世音を安置す日本の  
 に小島 僧惠壽といふもの爰に居たりといふさきに槐市長崎にて得られし溝の図に  
 里数をしるしたるを示さる 船つくと聞へければ唐館より五六人出来り源  
 発に／のり来りしもあり其人云やう源発ハ十二月の十日にこゝに  
 つきぬ其餘の壽昌／源興も三日四日おくれつきたり扱助次郎ハ  
 源発にのり移りしよりわきて／なやましげにて日を逐て病おもり  
 乍浦を出しより四日を経て十二月三日に／遂にむなしう死しぬそ  
 れより二日おくれて八官も死しきとかたる助次郎は」(145才) 連  
 も命助かるべうも覚えざりとも長崎迄事故なうあれかしとかね  
 て思ひ／設けたるが少し早かりし也

溝至鳥坵十一更、鳥坵  
 至普陀三更、至唐山  
 水色藍、近山水白、

<p>浦津</p>	<p>中溝                  来往至此金鼓、倣                  好事、此溝乃三寶大                  人説、明有神佛靈                  應、</p>
<p>浦津</p>	<p>溝至米辰馬十六更、米辰馬至                  五島三更、五島至長崎七更、                  溝至長崎水色烏、</p>

「(145ウ)

槐市老人云清人里程をいふに更と書す事あり俗語考に一更は六里或六十里ともありて／＼とい  
 一ならず清人中溝の國に五島より長崎にいたる事七更とあり五島長崎を去る事五十里  
 一更ハ大抵吾七里許にあたる普通より長崎迄四十更なれば一更七里の数を以て算ふる／＼志齊  
 に即我二百八十里許なり案に溝とハ松前の竜飛、白神、中の瀬八丈の黒塩、  
 に記したる落際、扱八官か死せしは思ひの外なる事なりけり五十路を  
 の類ひなるかも、扱八官か死せしは思ひの外なる事なりけり五十路を  
 ／こえつれどさしもすくやかにありしが定めなき世のならひとハ  
 いひながらいと／＼ほしとて涙をおとしけるさてありてこゝの役人  
 五六人來り船頭出て今日船／＼つきたるよし申并ニ我等の事を聞え  
 て役人にわたすさまなり此人々の沙汰／＼として我等の行李共を運  
 び出させ此行季ハ長崎御役所にもて  
 行後に我／＼に給はりたり／＼我等にも陸に上る／＼べき由沙汰あり  
 けれバ船頭はしめ其他の役人順光ニもいとまを告て船より出／＼け  
 るに役人に具せられ市町を数多たどり行き桜町の牢屋ヒトヤに入れけり  
 ／重五郎はしめ源発にのり渡りし六人の者共もさきに爰に居たり  
 けり凡（146オ）他の國に流れ行送れ歸るものはまづ始に牢屋に  
 入らる掟なり日ならず／＼して出さるへけれ心をやすくしあよと役  
 人のしらし聞え給ふ本より我等／＼十二人犯せる罪なけれバ二重格  
 子の囲ミの内にハ入らず只一重、ニ 囲の中に安け／＼居て牢屋とも  
 おもハれず二重格子の内にハ三人斗り入たるあり是ハさつま／＼の  
 人にてぬけ荷うりせし人とぞ守りの人かたりき扱十二人一ツ所ニ  
 あつまり／＼事なく此地迄歸りえしを悦ひ只残りをしきハ助次郎が  
 事也彼ハもと病多き／＼ものにてさきにも危き時もありしに長き年  
 月をしのぎ帰國にのぞミ／＼て死せしハいとほしき事なれ故郷に帰  
 りたらん時彼が親はらから／＼の尋ね問んに何と答ふべきそれらが  
 なげき深かるべしされども他國の／＼土とならんよりハ勝りたると  
 もいふべきかと打くどく重五郎いふハ源発（146ウ）に乗りて後  
 ハ身のいたミ強く食す、まず力おとろへてたくハへ持し薬はた／＼  
 船頭よりも心をつけよき薬与へつれどそのしるしなく十二月三日

に死ぬ／＼船頭の沙汰として大なる水桶を出し其内に蒲團にかひく  
 るミて入れ其上／＼かれが行李をその中に収めすべて彼が物とてハ  
 一ツも残さず跡に念なき／＼やうにしつ扱蓋を掩ひ綱もていく重も  
 纏ひフナハツクマ 舷の外につるしまた金／＼箔おしたる紙をやき弔ひこゝに  
 つきてのち其水桶を役人に渡しつるに役人／＼たち屍を改め我／＼  
 へも病のやうを尋ねられて後高臺寺へかりに埋めをかれし／＼八官  
 も助次郎が病を介錯しけるが風の心地とて彼が死したる時も出来  
 ／＼らず我等もこのまきれに八官をしたしう尋ねざりしが俄に病重  
 う／＼なりぬと聞て傍により見ればはや命危きさま也十二月六日と  
 いふに遂に（147オ）死したりといふ我も船の中にて風あしくほ  
 とく／＼船かへらんとせしもと／＼すゑからうじてさつまの片浦に入  
 り片浦と天草とへ二度走り戻り／＼しつ思はず日数増たるよしをか  
 たみにかたりかハすかくて翌廿一日は空も／＼はれ何の事もなく  
 牢舎ヒトヤの中にて日をくらしぬ廿二日には十二人共に御役所／＼に出べ  
 きよしにて役人に具せられ立山の御役所に出たり此時長崎をしり  
 ／＼給ふハ本多佐渡守と聞え給ふ君なりやがて白洲に引出さる我等  
 を送り／＼來せし支那の船頭三人えんの上に立たり上さまなる役人  
 多く居並らび／＼我等が仮名本國より漂流のさま國々を経てこたひ  
 支那より送り越されし一トわたり問せられ支那人より我等を請  
 取給ふさま也扱外國に有し時／＼宗旨す、めし事やあると問せられ  
 しにさる事露はかりもなしと（147ウ）申やがてかねの繪鏡すゑ  
 し盤を出され一人ツ、踏しめられ是ニて事すミ／＼て牢屋ヒトヤに歸され  
 き一日を隔て廿四日に又十二人共立山へ召出され我等が／＼行李を  
 とし江戸より持渡りし物はた外國にてもらひ請し物をこと／＼く  
 ／＼糺されいぶがしきふしなしとて此物共をそれ／＼に渡し給はり

ぬ此時／カ、ヤンのワシユにてサンカンの渡されし書付を奉り  
 けれバこれをうけ取め／玉ひぬまた支那錢残り少にありしをバ寛  
 永錢にかへて給ハリ事済て／まかん出ける今日も牢屋へハ帰され  
 ど鍛冶屋町に移しをかる是にて一入／心安かりき此後三度ばかり  
 召出され漂流の本末カ、ヤンマニランの事／なと尋させらる又  
 助次郎が死骸高臺寺にかり埋にせられしに今ハ／墓をいと名ミて  
 くるしからぬむねを仰らる是より高臺寺に詣て僧にはかり」(148  
 オ)高サ 四尺斗の石を建て面に伊豆八丈助次郎之墓とくきぶとに  
 ゑらせ回向／を手向けまた月牌料をよせて永く香花の絶ざるをた  
 のミけりかくて／江戸よりのたよりをまち帰国を給ハるよしなれ  
 バ日々にかしこ爰を物見／しまた唐寺に詣て八官が墓に香花を手  
 向けその他したしうせし支那人／にかへり申のために逢まくすれ  
 どかの館へハ掟ありてミだりに入る事を／ゆるされずさてこ、ら  
 近き人々としたしうなりて往来しありつるに／五月朔日八丈地役  
 人山本平次兵衛長谷川新八郎此地につきて公より迎ひに／越せよ  
 との仰をうけ来れるよしをつたふ此よし立山に聞えあげて同六月  
 ニ／此人と共に出立豊前の小倉より船にのりさぬきなる金毘羅へ  
 詣て／船中危難の時擁護いちじるかりしを額つきてかへり申し大  
 垣に上り」(148ウ)こ、に五日とゞまり諸所一見し伏見より京に  
 上り伊勢両宮へ詣て東海／道を経て六月廿五日江戸鉄炮洲なる八  
 丈會所につきぬ明けの日山本／長谷川の二人八丈の御代官田口五  
 郎左衛門君の御役所に出て昨日漂流人ども／を召つれ帰り来りし  
 由を聞え上げければ廿七日我等十二人を彼御役所へ／召出され御  
 糺しあり有し事ともあらましを聞へ上げ此日は帰されける／此後  
 ハおのれ一人を数日召出され漂流の始め終りくハしう尋させ給ひ

て／一ト卷の書につゞり立其中ニハ何某とかいひし人しておのれ  
 にはかり絵を／認め加へられき此事はてければ帰島すべきよし仰  
 下されさて便りの／船をまつ程に八月の半になりて八丈へ帰る船  
 ありよりて鉄炮洲よりそれに／打乗り明の朝嵐に帆上げて江戸を  
 走り出て船路風のたよりよく日数」(149オ)經て九月の八日に八  
 丈に帰り着きぬ今日つくと聞て我等か親子はらから／あるものハ  
 いふも更なりしたしき人相知るものども多く濱邊に出迎ひ船／よ  
 り出ると互に手をととり泣より外の事ハなしや、して事なく帰り得  
 しを口／くによるこび聞えやう／こ、を去りて島の長か許にい  
 たり今帰り／たるを申しかして各我家に帰り去りけり家にハ死し  
 たる人の生かへり／たるごとく悦ひの酒肴と、のへ置て人々より  
 つとびかたミにくミかハし夜／深る遠唄ひつ舞つしけり我等が出  
 てより久しく音信なかりしかバ／皆死したると思ひ定めて僧を招  
 き誦經し葬りのまねびしつ野邊にハ／石のつかを立家にハ魂棚に  
 あらぬ名しるしたる木牌をおき家を出し日を／その日と定めて香  
 花を手向けしに其木牌を打割り墓をこぼちすてなんと」(149ウ)  
 しつをかしうも事々しくぞ聞えし此中におのれが家のミ墓も立て  
 ず／木碑をもつくらずいかにと問へバ妻のいふ只何となく心に思  
 ふハ死し／給ふ事はよもあらいかななるあき鳥かねにもとりつ  
 き恙なうおハす／らんされば時来らハ目出たふ帰りますさんと  
 ミ思ひつまたあの末なる／嬰兒に向ひて父ハいつちへおハすと問  
 へバ遠き國に心よく起伏し／給ふ年経は帰り給んといひぬ嬰兒ハ  
 心に思ひはかる事もなきかく／いふは神のよりにいはしめ給ふ  
 にこそとおもひたのミて人々のごとく／いま／しきいとなミハ  
 せざりしさをあたり近き人々ハよりあひて／あの女は心づよく

情しらぬおにく／敷者なれなんとそしりたれば此村／なる巫女<sup>イナコ</sup>をよび梓にかけしに海に沈みて今ハさま／のくるしミをうけ」  
 (150オ) 浮び出る瀬なきをいかにせん口我がためよからん事を思バ、<sup>ママ</sup>仏事をあつ／うせよまた我にかはりて四人の子をいつくしミ育てあげよかしゆめ／怠るなといひきされど我心に叶ねばそが俣に聞流しつるがはたして／巫女<sup>イナコ</sup>の偽りごとにて今かく命目出たく帰りましたるハこよなう／嬉しきとて打なく彼巫女といふハ我家に常に入入りして物とらするもの／なりおのれが帰りて後も日数経るまで来らず人をやりて問へハさきに申／つることのたがひて面目<sup>メイカ</sup>なさにえ参らずとこたへぬ彼が言葉のたがひ／たるこそよけれとてしひて人して呼寄せ大ひに笑ひをなし後ハ本の／ごとく往来しけりかく帰りし人々の家にてよろこび泣しける中に助次郎／が親のなげき<sup>ウ</sup>目もくるしき斗なり偕神山に木をしたく神の怒りを」(150ウ) 休め奉らんと村の者へかたらひ島の長に申てかしこの山に苗木夥しう／うゑ神楽を奏して神鎮<sup>カシヅメ</sup>しけり此後ハ風波も希になりて船路心安う／覚えぬこたびの漂流に船をすてまた多くつミたる荷を捨たる事凡／こかね三千ひらの数よりもあまりつべしされば何事もいにしへにかはり／足らハぬ事のミ多く心うかりけれど十二人が命を購ひ得しと思ひかへて／過にき此程ハあなたこなたへ招がれカヤンチーナ<sup>ハナ</sup>の話聞る、人多かりふし／きに命助かりたれば此後ハ船のる業ハやめなんと思へど本より外の／たつきなければこりずまに船のりはじめがつる明の年の秋八五郎ハ／奥州岩城にて海におぼれ萬介ハ駿河の沖にて船をのり沈めともにも水屑と／消へ失ぬ世の諺に山だちハ山にくち船人ハ船にはつるとハ実<sup>マコト</sup>にうべ」(151オ) なりけりおのれこれをかうかへて家に

のミあらまくすれどやからともの／口に糊<sup>く</sup>するをいかにせんおそる／江戸にゆき通ひいさ、かのいとなミして／世を渡りける今よりして思ひかへせばさしも危していくちさとの外に／流れつき言葉もしらす心うかりし事共多き中に又したしくかたりかはす／人のいで来てつぎ／くに送られ帰り得しは道ある國々のはからひとハ言ながら／またく我 大皇國<sup>オホキヤシマ</sup>の御稜威<sup>ミイヅツ</sup>による事にてかしこしともたふとしともた、へ／つべうもおほえず涙こほる、わざになんあるざるををこなるすさびなれ／どこの一とふしをうまこひこつゝこ等にしらせまくて古にし日次<sup>ヒナミ</sup>の記を正し／て再ひかひ付るなりけり」(151ウ)